

詩とエッセイ::懐かしい風景 (1)

とよださなえさんの「追憶のカイロ」は2022年11月号のホームページで、第13回の掲載をもって最期となりました。しかし、まだ掲載されていない詩が彼女の手もとに残っています。その詩がここに戻ってきました。

今回はカイロの風景だけでなく、日常生活の中で心に触れた思いを綴った詩と、その後にかかれたエッセイがセットになったもので、時間の経過の中で見えてくる繊細な風景を温かい心で読み込んでいます。作品が綴られた日時は前後していますが、通してお読みになってみてください。今回からしばらく連載をいたします。誰でもが感じる日常の事柄を、美しい優しい言葉に纏めて表現しています。忙しい毎日の暮らしの中で、何気ない言葉に心が揺す振られます。(塩尻和子)

- 書き散らした終っていない詩のような、紙きれの袋がいくつか見つかった。新しいパスポートを受け取る為に、期限切れのパスポートを探していた時だ。会社の語学留学生でキューバに行っている娘が、体調をくずしているという。見舞方々行くつもりだ。

とよだ さなえ

地図を買いに

さくら市ってどこですか？
喜連川町と氏家町が合併して
出来た市です
下野市って 为什么呢
栃木県のことを 昔下野とは言いましたが
石橋町とどこが合併したのでしょうか
日本中 合併。
南アルプス市と
カタカナの名前が出てきたり
ひらがなの市になって
歴史を想わせる地名が消えています

今日は地図を買いに行くぞ！
と 夫が言った
エルサレムに
夫の私的取材に同行していた
地図なら本屋に行けば良いのでは？
という私に
そんな安直なものではないと
私の無知を見透かしたような顔付き

何の地図ですか？
アラブの地名を消して
ヘブライ語の別の地名に
してしまっているから
アラブの地名の地図を買いに行く！

なれたタクシーの運転手さんは
ユダヤ地区を走る時
外からすぐ見えるように
ヘブライ語の新聞を
フロントに置く
アラブ地区に入ると
何気ない顔をして
足元からアラビア語の新聞と
取りかえる
投石よけのおまじないか

インティファーダの続く
東エルサレムに入り
うらさびれた道を歩いた
日本人夫婦には
何が起こりうるのだろうか

その前日 夫は
普通の道に据えてあった
三十年も前に破壊されたヨルダンの
戦車を八ミリで撮っていた
通りかかったイスラエル兵にとがめられ
“大丈夫！”と一言残し
何事もないような足どりで
カメラを片手に
イスラエルの地元警察署に
連れていかれた

タクシーの運転手の方が
一人残る私を心配した目つきで
夫に付いて行った
一時間後
凱旋者の顔つきで戻ってきた夫は
“下っぱの兵隊がすることは

一応 良くやった 良くやったと言って帰し
こちらには 失礼したと言って
まあ お茶をどうぞと
世間話をして 兵隊がどこかへ消える頃
帰してくれる よくあることよ、

イスラエル行きの飛行機に乗る時から
はじめての私には
異様なものものしさ
スーパーマーケットの入口でも
皆 荷物の検査をされ
ダマスカス門の繁華街では
観光客で賑わう中 私の目の前で
公衆電話をかけている
若い男性の後から
二人組のイスラエル兵が飛びかかり
身体中をまさぐっていた
銃の有無を調べたのだろうか
無いとわかると 挨拶もなく
又 隣の若者へ
予告なしの
昼間の野外劇場

三十回と回を重ねて
イスラエルに来ている夫は
東京都内を歩いている時よりも
自信のある歩調
古いビルの前で何かを確かめるように止まり
中に入り 階段を登った
ある扉の前でベルを押し
かなりたって ドアを開いたのは
ヘジャブで髪を覆った女性だが
開いたドアの後には空間でなく
二重の鉄格子があった
鉄格子の間から いくつかの英語と
お金と 巻いた地図がいき交った
地図一枚のキモダメシ

ガマ蛙

芝生の上に
私のにぎりこぶし位の
黒い塊がある
片付け下手で
草取りの好きな私が
夕方 見た時にはなかったものだ
夜半の一時
お月様に挨拶をしようと
カーテンを動かし
空を見上げた
マンションの一階の庭だから
空も庭も 直線で区切られている
ひと頃と異なり
武蔵野の空は随分と透明で
月の光も澄んでいる
子供の時見ていた
宇都宮の月の光だ
庭に燈があるのに
黒い塊が何なのか
庭におりて 傍まで行った
ガマ蛙だ
私の気配に驚きもせず
月の方向を見ている
泰然自若として 月見をする
我が庭のガマ蛙
ガマ蛙との交きあいは 今迄になく
驚ろきはあったが
奇声は発しなかった私
夜半のマンションだから
何気なく抑えがきいたのか
ガマ蛙の静かなたたずまいに
気押されたのか
臆病に生きている人間の私の傍で
安心しきったように
月見を続ける生き物がいる
それ以来
ガマ蛙に 毎夜挨拶に行く私がいる

エッセイ：アルゼンチンで遇った沖縄

沖縄に関するテレビ、新聞記事が目につく。十一月六日の NHK 衛星第二の映画「深呼吸の必要」、昼間 NHK のスタジオパークのゲストは沖縄県人の藤木勇人氏。その前日と前々日はキューバの沖縄移民百年特集があった。十日の朝日新聞には大江健三郎の「沖縄ノート」の裁判について。

私がアルゼンチンのブエノスアイレスに NHK の特派員の女房として行ったのは、一九六五年の六月だった。結婚生活、外国、スペイン語、昼食から遅い夕食まで一緒に助手君、皆はじめてのこと。そんな中、八月、つまり入国して二ヶ月後に、自衛隊の練習艦隊が入港した。日本人、日系人が日の丸の小旗を振って迎えた。日系人の半分以上は沖縄移民の人だという。当時、沖縄では日章旗の掲揚は禁止されていた。日本に復帰していなかったからだ。しかし、時を同じくして、時の佐藤首相の沖縄訪問とあって、沖縄の小学生たちが日の丸の旗で迎えたが、米国もそれを止めさせることはなかった。地球の反対側それぞれに振られた日の丸の意味を考えさせられた。「あきづき、艦上からの、ラ・クンパルシータの演奏を録音したのは私の初仕事。

当時、約三万人の日系人がアルゼンチン全土にいて、沖縄系が八割という。ブエノスアイレスでは洗濯屋、二十キロ離れたエスコバルでは生花作りが主な職業だ。沖縄の村まるごと米軍の基地に接収され、アメリカ軍政府の身分証明書を持たされ、ポリビヤに移住しているとか、ひめゆり部隊や鉄血勤王隊の生き残りの人が、ブエノスアイレスに来ているけれど、戦争の話はしたくないと言っているとか、耳に入ってきた。

六七年四月、大浜信泉氏が来亜した。肩書きは南方同胞援護会々長。元早大総長。何のいきさつかは忘れたが、沖縄県人会主催の彼の歓迎会に同席させてもらった。宴もたけなわの十二時を過ぎた頃、立ち上り、発せられた大浜氏の言葉。「早稲田大学の総長となり、美智子妃殿下の教育掛となったのも、私をはじめの沖縄の人間であります、凄い拍手が湧き起った。自衛隊の練習艦隊に振っていた日の丸の振り方とは、腕の動かし方が異って見えた。

その一ヶ月後、六七年五月には皇太子御夫妻の来亜。日本紹介の番組がいくつか放映され、美智子妃殿下の着物姿がニュースに流れた。ブエノスアイレス市内の一番大きなパレルモ公園の中に、記念の日本庭園が造られた。世界中の移民で成り立っている亜国の首都。市民が訪れる中で、異彩をはなち、日本をアピールするには充分なおもむき。いつもの洗濯屋さんに、寄付が大変だったかどうかを尋ねた。店の奥さんは「私ら日本人ですから」と答えた。一般のアルゼンチン人には、ウチナンチューもヤマトンチューの区別もないし、日本の皇太子が来てよかったね、と言われれば、首を縦に振って、ニッコリしていたと思う。

東京大学の新聞研究所で、沖縄の日本復帰の意識調査をしていることを、日本からの新聞で知った。アルゼンチンに居て、日本人として出来ることは署名集めをすること、と夫の海外出張中に考え、動きだした私。たまたま六七年の十月、松岡政保琉球政府首席が来亜した。「何てたって、松岡さんは私らのお父さんなんです」私が出遇えた言葉だ。集まった署名は三百人だったが、首席に渡す「式典」を取材に来てくれた夫の友人である AP のカメラマンは、何故か「三千人の署名」と打電していた。